

神楽坂



芸者小道



かくれんぼ横丁

古き良き江戸情緒が残る、粋でおしゃれな街

東京のど真ん中に江戸の面影を残す、坂の街・神楽坂。大通りから一步路地に入ると、石畳のしっとりした路があり、和の小物を扱う雑貨屋さんがあるかと思えば、また別の路地に入るとそこは美味しいフレンチのお店やワインバーなどが。脈々と受け継がれる老舗の伝統や花柳界の文化に加え、新たな現代的魅力を身につけ発展しつつづけている、粋でレトロでおしゃれな街。神楽坂は今も多くの散歩人を惹きつけています。



神楽坂駅矢来口からすぐの陶陶酒ショップ。



お気軽にどうぞ!

●歴史

14世紀頃、群馬県赤城山南麓の豪族大胡氏が今の光照寺周辺の台地に牛込城を築いたのが神楽坂発展のはじまり。

そして江戸時代、大老の酒井忠勝が坂上の矢来町に屋敷を拝領した1628年頃、坂下には江戸城の外濠、牛込見附が完成し、両者をつなぐ約1kmの大老登城道が造られ、これがほぼ現在の「神楽坂通り」です。沿道は武家屋敷として地割りされました。

1658年には、牛込から和泉橋まで神田川が開通、現在の飯田橋駅北側に湊が開かれ、軽子坂付近は多くの人と物資が行き交う場になりました。

江戸中期になると、毘沙門天(善国寺)の「寅の日」、出世稲荷の「午の日」の縁日の賑わいに、赤城神社および行元寺前の岡場所の賑わいも加わって、爛熟の江戸文化を謳歌する街となったのです。

明治期になると武家屋敷が撤去されて神楽坂は町人のまちとなり、今より急峻で階段もあった神楽坂通りは緩やかな坂道に変わりましたが、路地などの街割りは現在に至るまでほぼそのまま残されています。

新宿区観光協会「神楽坂のまち・路地・歴史」より抜粋

神楽坂へのアクセス

JR総武線・飯田橋駅下車(西口)
地下鉄 都営大江戸線・東京メトロ有楽町線/南北線/東西線
飯田橋駅下車(出口B3・B4a)
地下鉄 東京メトロ東西線
神楽坂駅下車(出口1 神楽坂口)



赤城神社

西暦1,300年頃からの歴史がある神社ですが、平成22年に老朽化などの理由で、建て替えられました。設計者は赤城神社近くに住む、著名建築家「隅研吾」氏。



兵庫横丁

正面の黒板塀が旅館・若可菜。



毘沙門天(善国寺)

開基は徳川家康、開山は池上本門寺第12代貫主である日惺上人と伝わります。安土桃山時代の文禄4年(1595年)、馬喰町に創建され、寛政5年(1793年)に現在地へ。本尊の毘沙門天は江戸時代より「神楽坂の毘沙門さま」として信仰を集め、芝正伝寺・浅草正法寺とともに江戸三毘沙門と呼ばれた。現在は山手七福神の一つに数えられています。

兵庫横丁

かつて武器商人がこの辺りに住んでいたことからその名がついたと言われる横丁で鎌倉時代からの古道。

旅館・若可菜

山田洋次、竹山洋、倉本聰などのそうそうたる監督や脚本家が愛用した旅館。数々の名作は、このひっそりとした石畳の路地裏から生まれました。

本多横丁

旗本・本多対馬守の屋敷があったことから名がついた、多くの飲食店が並ぶ神楽坂を代表する横丁。



本多横丁

相馬屋・山田紙店

夏目漱石や尾崎紅葉は「相馬屋」の原稿用紙を愛用し、川端康成や吉行淳之介は「山田紙店」のを愛用したと言われています。

かくれんぼ横丁

迷路のように入り組んだ石畳の一角で数々の名店が並ぶ。かけもちの芸妓が客に見つからないように使った道だそうです。

軽子坂

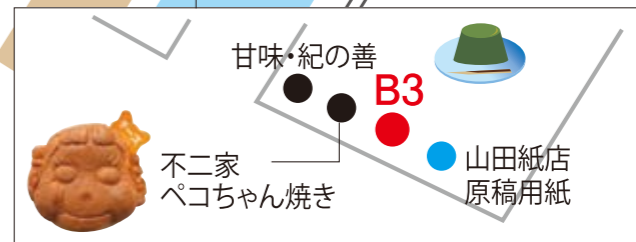
今の飯田濠にかつて神楽河岸がありました。軽子とは軽かご持ちの略称で船荷を軽かごに入れ江戸市中に運搬することを職業とした人がこの辺りに多く住んでいたことからその名がつけられました。

小栗横丁

小さな飲食店が並ぶ横丁。小栗という名の武士の屋敷があったことからその名がつけられました。この一角には泉鏡花の旧宅があったそうです。

神楽小路

小さな飲食店が密集する一角。途中にあるみちくさ横丁ともども通好みの店が集まっています。



甘味・紀の善

不二家

ペコちゃん焼き

山田紙店

原稿用紙